社會病ト其良藥

325
376

始

325-376

東京帝國大學圖書館藏

エ、ア、ツルペン著

社會病ト其良藥

大正
4.10.16
寄贈

教學研鑽和佛協會藏版

寄贈本

社會病と其良藥

第一の事實

現代の人間が甚しく苦められて居る所の一致の要求に應じて起つた科學の功績は頗る顯著なるものがある、其の嘗て爲したる所今猶爲しつゝ在る所のものは、蓋し測り知られぬ程である。實に科學の力に由りて世界の大体的一致が促されたる其活動は目覺ましきものにて、古今の歴史に未だ曾て其の類例を見たることが無い。科學は宛ながら一大魔術にても使へるかの如くに、人種の區別をも、國民の相異をも、社會の差別をも、忽然として抹殺し去つた。而して一切

を結合し、一切を平等にし、人類の間に曾て築かれ在りし障壁をば悉く打破つた。陸には一條の鐵路を走る汽車を發明して、國と國、民と民とを押隔てし距離を短縮し、海には萬里の波濤を蹴る汽船を創造して、大陸と大陸、島嶼と島嶼とを連繫し、其間に横はる深淵をば殆んど之を埋め盡した。飛行機を製出しては空中を征服して、國と國との彊域を撤去し、電信機を發明しては一瞬能く世界の果てより果てに人々の思想を通じ、電話機の案出に依ては互に遠隔せる人々の談話を宛然數歩の距離に於けるかの如くに近つけた。此類のことは實に枚擧に堪へない程である。此等の利器に依て賣買貿易、有ゆる商工業上の取引は、世界到る處の市場に於て同時に、同一の人を以て行はるゝやうになつた。要するに人類をして一致結合せし

ひるが爲め科學の貢献したる功績は夥しい。其事柄を委細に列擧せんと欲すれば、到底一日や二日の能くし得る所でなく、如何に努むるも月を重ね年を積まねばならぬ事業である。隨つて又この小冊子の能く收錄し得る所でなく、それが爲には更に尨大なる幾卷の書をも編まねばならぬ。實に人智は科學の翼に乘りて一致に向ひ、結合に向ひて驚嘆すべき長足の進歩をなした。是れ第一の事實である。此事實や其もの自らの發せる光輝に由りて明かに立證せられ、他には何の證論をも要せざる程明確顯著、疑の容る可き餘地無きものである。

第二の事實

科學が人類を導いて一致結合に向はしめた。それは爭ふ可らざる事實である。其功績は之を沒せんとするも沒することは出來ぬ。然し如何なる方面に於て科學は人類の一致てふ現象を實現せんと努めし乎。此問に答へて吾曹は遺憾ながら明言せねばならぬ。それは物質的方面若くは外形的方面であつた。それ以外に於ては何もないと然り、全く物質的一致、外形的結合に限られた。唯それのみである道德的一致、社會的融和、換言すれば感情の融和、精神の結合、智識の統一、意思の輯睦、此等の爲には竟に何の益をも與へなかつた然り、此方面に於ては全然無効である。是が又第一の事實と眞に恐る可き對照をなせる第二の事實で、彼と等しく其もの自らの明かに立證せる、顯著なる疑ふ可らざるものである。不幸にも現代の社會

には一目にして此事實が立證せらるゝ。看よ、從來物質界に於て人と人、民と民との互に接近し相結合することを妨げたる障壁は已に倒され、少くとも大いに低められた。然しそれと同時に、社會の方面、智識の方面に於ては、人と人、階級と階級、感情と感情、精神と精神とを隔離する障壁が殆んど踰ゆ可らざるまでに高められた。言を換へて云へば、科學は同一社會の中に生息する人々を隔つる距離をば減少するが爲に何の用をも爲さなかた。過去既に然り、將來も亦必ず然るに相違ない。否、科學は單に人々を社會的に近つくるが爲何の貢献も無きのみならず、寧ろ反りて其を阻隔し背叛せしむるやうに力を用ゆると謂うても可い。何となれば科學は其種々なる發明に由りて、世界の平和に望ましき偉業をば齎さずして、反りて

世界的戰亂の慘禍に其幇助を與へたからである。其自らの進歩に由りて、人々の間に友愛と親睦との關繫をば造らずして、反りて互に同胞と稱しつゝ在る國民の間に種々なる鬪爭的破壞的勢力を增大したからである。實に吾人の今日眼前に見る如く、人類をして分裂せしめ爭鬪せしめ、而して互に他を破壞せしむる爲に倍々怖る可き器具を常に供給せるものは科學である。特に此二十年來、前代未聞とも謂ふ可きほどに喧しく平和の唱道されしにも關らず、萬國競うて兵備を修むるに汲々たりしことも、亦未だ曾て其例を見ざる程であつた。而して言ふも悲きこと乍ら、此等の武裝は全く科學の進歩と同一の步調、同一の比例に於て到る處に增大せられ擴張せられた。單にそれのみでない、到る處に兵數の增加すると共に、破壞と滅亡

との器具も彌々精巧となり益々其勢力を加へて來た。今も猶日々に兵數は增加され刻々に殺人の器具は强大となりつゝ在る。さて此破壞と滅亡との新勢力を供給せる名譽をば當に何者に歸すべき乎。言ふまでもなく、科學の諸發見諸發明に歸さねばならぬ。此名譽を負ふ可きもの科學を措て將た何者かあらう。

爰に科學が國民と國民とを助けて互に相爭鬪せしめ、互に相殺戮せしむるが爲能ふ限りの一切を爲せる事を見たる吾曹は又當然の權利として、科學が物質界に於る其發明と其進步との偉動に由りて、現代社會の爲に、就中人々を導きて相愛せしめ、相結ばしめ、眞に同胞の實を擧げて相親和し相一致せしむるが爲に、何を爲せるかを問はねばならぬ。此方面に於て科學は曾て何の用をも爲さなかつた

今猶何の益をも與へない。此方面に於て何の用をも爲さず、此目的に於て何の益をも與へぬ科學は、其及ぼせる影響なるものも左のみ頌揚すべき價値ありとは謂ふことが出來ぬ。例せば現に全世界を震憾せしめつゝ在る大戰爭の有ゆる戰場に、然り前代未聞の虐殺と蠻行とに由りて流血漂ふ戰場に、誰か新文明の燦爛たる美花、即ち平和と親睦と一致と友愛との美花を開かしめん爲、敢て科學の力を恃み之を劇賞する者があらう。开は科學の最も熱中する所は正に最も殘忍なるものであるからである。是れ吾曹が社會的調和の爲、即ち感情の融和、精神の結合、智識の統一、意思の輯睦の爲に、科學は曾て何の用をも爲さなかつた、今猶何の益をも與へぬと云ふ所以である。是が第二の炳乎として蔽ふ可らざる事實である。

第三の事實

今や吾曹は科學の賜物を受けて武裝せる凡ての國民の前古未曾有なる慘劇、即ち其相互の間に戰慄すべき破壞力を逞うしつゝ在る悲慘の現象をば姑く措きて、吾人各々の自國内に目前行はれつゝある所のものを一瞥することゝせん。

吾人が各々自國と呼ぶものゝ中にさへも吾曹は何を見るであらう乎。互に相愛し相睦みて一致結合せる同胞である乎。否々、遺憾ながら爾うではない。此處にも同じく吾曹は聲を大にして、平和友愛の說かるゝ呼號を聞く。而も其實際に於ては、互に憎惡し、互に嫉視し、相怨望し、相憤怒して搏ち合ひ噬み合ふ群衆を見る。互に黨

を立て派を分ちて、相詬罵し、相凌辱し、相誹謗し、相排斥し、有ゆる權謀術數を弄し、時としては暴力に訴へてまでも、互に鬪爭し互に破壞し合ふ政黨者流をも見るのである。而してそれが政治學、道德學、宗教學などゝいふ孰れも科學の名に因りて爲されて居る。其他尙吾曹の見る此類のことは頗る多い。

されば人々の間の一致、その友愛的和親なるものは、科學に於る吾人の進歩と正に背馳すると謂はねばならぬ。亦は爭ふ可らざる明白なことで、科學の威力が吾人の間に高まれば高まるほど、社會的親睦は彌々吾人より遠ざかる。換言すれば、科學的進歩が益々加はれば加はるほど、眞の社會的進歩は彌々減退する。科學が其目覺ましき發見に由りて、新智識新威力を現代人の手に置けば置くほど、彼等は互に相憎惡し、相嫉視し、相反撥し、相破壞し合ふ爲、其智識其威力を利用することを發明する。是れ炳乎として到る處に見らるゝ第三の事實である。事實そのものゝ證明によつて、苟くも眼ある人には誰人にも明かに認め得らるゝことである。

吾曹は尙繰返して斷言する、同一國人の間に於る和合平安の爲に科學は竟に何の益をも與へぬ、絶て何の用をも爲さぬ、亦は明白なる事實である。科學は社會をも個々の人々をも將た同一國民をも精神的に接近せしめず、道德的に結合せしめぬ。現代の社會病、即ち反目睽離の病弊を拯ふ爲に、科學は竟に一の貢献する所も無いと。

第四の事實

吾曹は爰に概論の筆を止めて、更に聊か其詳論に入らうと思ふ。請問ふ、抑も社會の綱紀が依て立つ基礎たるべき根本的一致を現實するが爲、先づ人々の依て以て互に相提携すべき樞軸なるものは何である乎。吾曹をして之に答へしむれば、亦は智識の一致であると云ひたい。何故なれば思想界の睽離は實に他の一切の睽離の根本である、人と人とを引離す憎惡、潰裂、混亂等は皆此處より來るからである。尙詳言すれば、智識の睽離が他の一切の睽離を孕み且つ生み出す。道德界の混亂も、政治界の反目も、將た宗教界の分裂も、一言にして蔽へば、社會の有ゆる潰裂は皆此に由來して居る。請ふ忘

るゝ勿れ。吾人の衝突も不和も、爭論も憎惡も、嫉視も忿怒も、怨恨も混亂も、凡て其本を糺せば皆智識の睽離に根ざして居ると云ふことを。

若も科學にして人類全體の一致、言ひ換ふれば、人類社會の調和といふ此困難なる問題を解決し得る力があるならば、其力は先づ第一にその當眼の職責なる智識界の睽離混亂を除却し、少くとも之を減少せしめて、多少たりとも思想界の一致を實現せしむることに於て示さるべき筈である。

さて科學は將來智識界の一致を造り、由りて以て社會の綱紀の一般的調和を促し、且つ之を發達せしむる爲に何事を爲したる乎。科學の爲したるものは何も無い。その貢獻は此點に於て絶無であつた

看よ社會の現狀を。智界の到る處に叫ばるゝものは唯睽離の聲のみ分裂の聲のみ、混亂紛擾の聲のみである。他には竟に何物も無い。今日の如く思想界の紛糾混亂を呈せることは、古來曾て其例を見ざる所である。道德上の學說も、敎育上の意見も、將た哲學上の諸流派も、甚しきに至つては宗敎さへも、但し羅馬加特力敎一つを除きて、然り單に此宗敎唯一つのみを別として、他は孰れも皆又到る處に睽離し、分裂し、崩壞に崩壞を重ね、粉碎に粉碎を積んで居る。而して吾人は其細分され破壞され粉碎されたる無數の微塵の充滿せる思想界の氛圍中に呼吸して居るのである。約言すれば、現代智識界の氛圍氣は雜多の學說、雜多の意見の微塵に過ぎぬ。今日の人智は其微塵の中に喘ぎつゝ、不安と疑懼と、又時としては悲慘なる失

望とに、窒息せんとして居るのである。

此憂ふ可く悲む可き現象は何處から來た乎。开は種々雜多の哲學者、思素家、著述家の爲したる事業に本づく。彼等の責任や實に重大なるもので、這は誰人にも容易に判明することである。實際彼等の間に二人その智識の全然相一致し、相符合せる者を見ることは出來ぬ。假りに吾人を押離し引裂き打碎ける智識の混亂狀態は、科學其ものが生んだのではない、現代思想界の紛糾混亂を來たしたのは決して科學其ものゝ罪ではないとしても、而も猶科學は其紛碎混亂を防遏することをば爲なかつた。其を救治する良藥をば竟に一つも齎らさなかつた。否、良藥を與ふることは畢竟彼に不可能なのである。智識の王國は依然として睽離し、分裂し、混亂して居る。否、

科學が益々進歩すれば進歩するほど、その睽離、分裂、混亂は彌々太甚しくなる。是は否む可らざる實際の事實である。吾曹は信ずる縱令科學其ものが現代思想界の混亂の有力なる動因ではないまでも尙且その有効なる良藥では斷じてないと。是は眼前の事實が曉かに證明して居る。是れ第四の事實である。

第五の事實

吾曹は玆に百歩を讓りて、實際に於ては科學の力に到底及ばざるもの即ち智識の統一をば姑く能し得るものと假定せん。而も尙社會的和合を圖るが爲には、科學が能く意思の一致を造り出す力を具ふることを要す。如何となれば此關係の下にも他の凡ての場合と等しく、和合は專ら多數の一致より生ずるものにて、若し苟も凡ての意思の一致結合する爲に其輳合すべき中心點なるものゝ無きに於ては那處に社會の和合が成立つべき。啻に和合の無きのみならず、社會其ものさへも存在する筈が無いからである。例を擧げて之を解かんに、爰に一つの社會ありと假定せよ。其社會に生息する人々の意思は、何の聯絡も無く、何の關繫も無く、團結せずに反りて分裂し、聚合せずに反りて離散し、和親せずに反りて爭鬪し、親密に相一致し相結合せずして、反りて絶對に相離叛し相阻隔して居るとしたならば、斉は全く無政府的の混亂狀態にして、其混亂の中には社會といふ思想さへも發見することは出來ぬ。社會の影法師、社會に似寄の物さへも存せぬであらう。强いて言はゞ斉は唯個々の人々が雜然

として一處に寄合うて居るといふに過ぎぬ。否、其人々は寄合うて居ると云ふよりも、寧ろ個々別々に分離して居るので、其物質的集合、外形的接觸にも關らず、譬へば海岸に打寄せられたる砂粒の如く、或は空中に渦卷く微塵に似て、全く個々別々に孤立したるものが一處に群り居るといふに止まる。要するに純然たる社會的狀態を成立せしむる爲、換言すれば、社會的和合を實現する爲には智識の一致と共に意思の一致も必ず無くてはならぬ。此一致の缺く可らざることは理論も、經驗も、常識も共に敎ふる所である。

夫れ然り、已に然らば眞成の社會的狀態を建設するが爲、別言すれば、人々の間に社會的和合を成立せしむる爲、その社會の意思を綜合して之を一致せしむる中心點となる可きものは何であらう乎。

吾曹は堅く信じて斷言する、开は慥かに權威と呼ばるゝものであると。實に權威は意思を統轄する法律を立て、意思は其法律を遵守するに由りて同一權威の下に綜合され、統一さるゝことになるのである。是れ凡ての國家に必要なる條件で、別ても有ゆる社會的進步に缺く可らざる要素である。

此權威は一人に代表されても、將た多數に代表されても、換言すれば、立君政體でも、共和政體でも、その本來は全く唯一のものである。此唯一の權威は其立法と其行政とによりて、其權能と其主權とを立つる一切の意思に到達する。實に權威は人生の根據であり、其完成の原動力であり、社會的和合の樞軸、同國民間の平和の源泉その結合友愛の根元である。苟も之れ無ければ、开は無政府的の混

亂狀態である。分裂、睽離、憎惡、排擊、滅亡である。

偖斯も大切なる權威を尊重し、且つ之に服從すること、即ち唯一の中心なる權威の下に個々の意思を綜合し統一することは、科學の進歩と同一の步調を以て進んで居る乎。權威の尊ばれ敬はれ重んせらるゝが爲に、科學は現に何事を爲しつゝ在る乎。權威の下に、或は權威によつて意思の一致を造り、若くは少くとも之を援助するが爲に、科學は抑も從來何事を爲したる乎。何も爲さぬ。此點に於て科學の貢献は絕無である。否單に貢献せざるのみでなく、此方面に在りて科學の爲せる所をば吾曹は明かに知つて居る。科學の心醉者等は常に科學の名に因りて最も大膽なる輕侮を權威に向つて投つけた。彼等は科學の無際限的自由とか人智の絕對的主權とか勿體らしい名を附けて、其を押立てつゝ獨り神の權威にのみならず、人間の權威即ち帝王若くは大統領其他有ゆる權威にまで敵對する。智識界の多數の學者は宛から社會に於る權威の破壞者として自任して居るかの如くである。彼等は孰れも人智の最も誇る可き勝利かの如く、或は新時代の特殊なる榮譽かの如くに、科學と權威とは絕對に相容れざるものである、到底兩立せぬものであると絕叫する。此等の學者は、社會上の見地に於ても、現代の人々の中に權威の根本を破滅するやうに有ゆる道を講じて居る。ア、此等の學者は如何に罪深き者なるぞ。縱し近世科學の某々代表者の双肩に懸る可き責任は今姑く問はずとしても、尙看過す可らざる明白にして的確なる事實は、科學の隆盛と權威の動搖とは何時も到る處に隨伴するといふ事で、

是は大に注意に値することである。此事實は火を睹るよりも明かにして拒否することは迚も出來ぬ。現に日本でも他國でも萬國到る處に有ゆる權威の基礎は今正に一般に動搖を感じられて居る。

既に然らば吾曹は一切の和合、一切の社會的完成に缺く可らざる原動力であり、脱す可らざる要素である所の權威に本づける意思の一致の實現を科學に向つて期待することが出來よう乎。科學は此問題、即ち社會を痛ましき苦悶に立たしめて居る此問題を解決する力が全く無い。是れ第五の事實にして、此事實も其もの自身立證して居る明白なる、顯然たる、疑ふ可らざるものである。

第六の事實

社會問題に於て科學の全然無能力なることは、權威に由りて意思の一致を實現し得ざることのみに止まる乎。否々決してそれのみではない。社會問題の解決に就ては、科學の爲に尙一層打克ち難き困難がある。その困難に逢着しては彌々科學の無能力なることが瞭然と露はれる。然らば其は何かと云ふに、感情の一致を實現するといふ困難である。忘れてはならぬ、同一の眞理を以て智識を統一し、同一の權威に依て意思を一致することが已に科學には不可能であるといふことを。然らば況んや混然同氣の友愛に衆多の感情を一致するをや、开は愈よ不可能に畢るべき筈である。縱令僥倖にして智識の睽離と意思の混亂とをば能く社會より驅逐し得るとしても、特に社會の大患なる國民相互の間の嫉視、怨望、憎惡、就中現代社會を

唆嗾しつゝある憎惡てふ社會の害蟲をば到底驅除し得るものであるまい。此嫉視、怨望、憎惡などを社會の人心より根絶することの出來ぬのは、是れ正に此道德的疾病を癒す爲に、科學と呼ばるゝものゝ無能力を明かにするのである。此道德的大患を根治することが無くては、社會の救療劑として何の効も無いものと謂はねばならぬ。

曩日誠心誠意なる若干の人士は我國の社會にも恐るべき道德的疾病の漸く蔓延するを見て、深く之を憂ふるの餘り、此疾病を救ふべき良藥を求めんと欲し、國內に弘まり居る基督敎、佛敎、さては其他の諸宗敎にまで眼を注いだ。然し遺憾なる哉それは無効であつた吾曹は慥かに豫言し得るが其は今後とても必ず無効であらう。否單に無効なるに止まらず、其等雜多の宗敎が此國內に奮起すれば奮起するほど、睽離、分裂、不和、混亂は彌々滋くなるであらう。近き二三十年來の經驗は十分それを立證して居る。其經驗に據れば、古來曾て我國の歷史に見しことも爲き不從順甚しきは反逆心さへも、今日吾人の眼に映ずる如く、此國內に發生した。その根源を探れば吾曹は容易に之を認むることが出來る。

开は兎も角、宗敎學者の列席する華やかなる會合よりも、神の榮譽、人靈救拯の爲には、柔和、謙遜、愛情、並に献身の方が寧ろ優つたことであらう。又實際に其等雜多の宗敎が——但し羅馬加特力敎のみは除外して——自ら有せざる所のものを如何にして他に與ふることが出來ようぞ。吾曹が爰に言はんとするのは、一致、平和、服從、智識と思想との一眞理に於る和合、意思の同一權威に於

る統括、此等のものに就てゞある。一例として基督新教を取らんにその内に含める分派の數は夥しい。而して其凡ての分派が互に異說を主張して相爭ひ相斥け、その基礎たるべき主要の敎義に於てすら毫も一致して居らぬ。或派の者は基督を神と視るも、他の派の者は否らずとする。或派にては洗禮を以て永遠の救靈に缺く可らざるものと爲すも、他の派は之を否みて只一の儀禮に過ぎぬ、儀式に止まると考へる。又或派にては監督を立つるを神の定められたる制度であると信じ、現に之を戴いて居れども、他の派にては之を拒む。或派の者は斯々の敎義、斯々の誡律、斯々の信條、斯々の勤行を承認するも、他の派の者は此等のことを否認する。而してその凡てが常に變化し絕えず異動して、所謂昨是今非、朝三暮四、幾んど到り止

まる所無く、爲に其の何を信じ何を棄つべきかを知らず、實に五里霧中に彷徨するといふ情態である。乃ち彼等は纔かに己れを紛らして安心の態を粧ふ爲に、屢々博愛慈善その他の事業に身を委ぬる。それに由りて時としては頗る感嘆に値する事業を成すこともあるがそれは畢竟個人個人の貧苦窮阨を救濟慰撫するに止まつて、社會の分裂、不和、混亂をば、癒しもせず、救ひもせず、跡を絕たしむることは尙更無い。隨つて人々の間の平和、親睦、一致といふことは依然として缺けて居る。爰に特に斷つて置くが、吾曹は斯く言ふも決して人身攻擊をする積りでない。何故なれば吾曹は新敎諸派の中にも、希臘敎派の中にも、將た佛敎諸宗の間にも、恪謹、誠意、懇篤、忠實なる紳士の多數あることを知つて居るからである。只彼等

の信念の然く不徹底なる、然く不堅固なるのは、其生れたる境遇、受けたる教育、與へられたる薫蒸が然らしめたるものである。故に吾曹は其信念を咎むるので、斷じて其人を批難するのではない。

尙一歩を進めて論せんに、前記凡ての宗教は孰れも多少その起源が新しい。その創立は都て人爲に本ついて居る。中には甚だ尊敬すべからざる根源より起りたるものさへある。例せば殺人、姦通の罪を犯せし英王ヘンリー八世の如き、猾智、放肆、傲慢、叛逆、殘忍虚僞等種々の不德を有したる修道者ルーテルの如き、國法上の犯罪人として公けの法廷に耻づ可き烙印を其肩に捺されたるカルウヰンの如きが其れである。此類の者は枚擧するに遑がない。彼等の爲し〻事業は其弟子等によつて甚しく變化せられ、今猶變化しつゝ在る

若も今日彼等を地下より呼び起して其樣を見せしめたならば、その已れの遺業なるものが何處に在るかを認むるに苦み、嘸や驚くことであらう。凡て人爲の事業なるものは、一切人間の事物と等しく、變化するといふことが其性質である。蟲を果實に附かしめて見よ。最初には其成熟を早めて、幾分か其味をも良くするが、頓ては漸く變味を來して、終には其全體を腐らして了ふ。僞宗教は實に社會を腐蝕する害蟲である。

夫れ凡ての基督新教徒は眞理を把捉する爲に專ら聖書に依據すると唱道する。若し予にして誤らずんば、彼等は誠心誠意を以て聖書を讀む總ての者が謬無く聖靈より眞理を受くるといふ原則を立つるのであるから、其信者なるものは誰人に論なく皆必ずや誠心誠意を

以て聖書を讀んで居るに違ひない。然るに何故聖靈は同一の本文同一の事項に就て、此者には白しと敎へ、彼者には黑しと敎ふる乎。例之ば甲は基督を眞に神であると思ひ、乙は基督を單に人間に過ぎぬと言ふ。此種の例は幾らもある。抑も斯の如き原則を認容するのは洵に神其ものを冒瀆することではあるまい乎。又自然の勢、思想にも信念にも睽離、分裂、混亂を助長し、釀成さへもするものではあるまい乎。隨つて又必然に人々の間の不和、憎惡、猜疑等、即ち社會の疾病を誘致し、助長するものではあるまい乎。遺憾ながら吾曹は多く其事實を認めて居る。忘れてはならぬ、此世の中に憎惡、嫉視、猜忌、怨望等の勢を振ふ間は、社會の福祉を進め、人民の幸福を增す爲に竟に何事も成らぬといふ事を。憎惡、嫉視、猜忌、怨望等は啻に感情の融和、精神の一致を導かんとする一切の努力を水泡に歸するのみならず、科學其ものゝ與ふる物質的恩惠をまでも禍に轉ぜしむる。玆に於てか問題は又前に溯る。抑も科學が如何に優秀なるものにもせよ、憎惡、嫉視、猜忌、怨望等を人心より驅逐して、其等に代りて愛情、平和、親睦等を其處に入るゝ爲に、能く何事を成し得る乎。何もない。絕對て何事をも爲し得ぬ。と眞實の答は是れである。是が又他の事實と同じく、明白なる、顯著なる、疑ふ可らざる第六の事實である。

以上の如くんば眞に失望すべき情態であるが、吾曹は躊躇なく之に加へて左の如くに謂ふ。即ち社會の現狀は今より六七十年の前、一千八百五十年頃に比ぶれば、聊か良好に向つて、其處に多少は希

望の光明さへも認められるやうになつて來たと。試みに知名の學士會員バウル、ブールジェの言へる所を聞け。彼は曰ふ、

『科學、或は一層正確に言はんとすれば諸科學は、慥かに其歩を進めて居る。その最初の盡力に依りて一千八百五十年の諸科學嘆美者等の眼に描いた宇宙の畫面は今や非常に變更された。特に擴大され、豊富となり、深遠となつた。萬物が法則を有するといふことは諸科學の絶ゑず敎へ來つた所であるが、其等法則の性質に就ては輓近甚だしく變つて來た。我最初の科學者等は夙に又暫くの間、自然には旣に神秘無しと言ひ得たが、今日の學者等に取りては、自然にして神秘ならざるものは一つも無い。余輩はジュール、タヌリイやアンリ、ポアンカレの如く、

最も正確と見られた科學の確實性を批判して、其根本に潜める不可解の謎を指摘した有名なる數學の大家をも見た。又余輩はウヰリアム、ジエームスの如く、宗敎的事實を悉く最も承認すべきものとして考へ、結論して次の如くに言うて居る心理學兼生理學の大家をも見た。その結論に曰ふ『現實の世界は科學の世界よりも甚だ豊富に且つ甚だ複雜に造られて居る。人間一切の經驗は其の活潑々地なる現實に於て、予を强いて、科學が吾人を閉込めんとする狹き限界より脫出せしむ』と。

バウル、ブールジェエは尙語を續けて言ふ、

『之と同一の思想はブートルー、グラッセ、バレース、ブシカリ、ジョルジュ、ソレル、其他多くの人々の著書に一貫して流れて、

居る。余は爰に斷じて言ふ、其方式を非常に多樣なる諸現象に適應せしめ、且つ擴充せる已れ自らの發展によりて科學偏僻狂を打破した者は科學それ自身であると。パスカルは聰明にも夙に喝破して理性の解せざる彼等の理とは何ぞや』と言うて居るが、科學は此力ある言を再び確認するに至つたのである、パスカルの此言は決して道理を非難しようといふ意味ではない。人生に適合すべく其れに缺けて居る所の要素を補足し完成しなければならぬといふ意味である』と。

以上バウル、ブールジェより引用せる所は聊か長きに失し、且吾曹が此小冊子に劃られたる範圍外にも及んで居るが、而も尙吾曹の爰に之を引用せる所以は、科學が漸次謙讓の態度を取り來れるやうに見ゆることを示し、併せて科學が如何に偉大に如何に優秀なるものにもせよ、其獨力にては竟に實現することも、到達することも出來ざる多くの事柄があり、就中人々の間に社會的一致を造ることは到底其力に及ぶ可くもないといふ事を悟らせる爲である。かの知名なる學士會員にして、又名聲の嘖々たりし學者ブルンチェールが其著『科學の破產』に於て語りたる所も亦此意味に於てゞあつた。

吾曹は爰に大切なる一つの注意を請ひたい。それは全人類を惱ましつゝ在る所の病弊、例せば此國民から彼國民と同時に爆發し、或は同一國內に於て相憎み相脅し相鬩ぐ所の同國民の間に齊しく破裂する爭鬪の如き病が科學其ものに原因するとは、吾曹は決して言ふ積りでないといふ事である。何となれば二つの現象の一つが他の一

つの原因たることなくして、空間及時間の同一點に出會ふことに有り得べきもので、單に同時並存といふ事は因果の關係を示すものではないからである。此公理を遺忘することは無論誤判の大なる原因の一つであらう。故に吾曹は單に二つの現象が同時に起つたからとの理由のみで、科學の進歩其ものが人類の潰裂と社會の不和合とを發生させたと謂ふのではない。又社會主義の癩菌が科學の進歩と同時に世に蔓つたからとて、科學其ものが社會主義を生んだとも、社會主義より社會病が起つたとも謂ふのでない。然しながら吾曹は實際現に世界を吹捲りつゝ在る風潮の下に、科學の進歩が現代の人々の間に偏く非社會的の或物を發達せしむるに與りて力あることを默々に附することが出來ぬ。その非社會的の或物とは傲慢即ち之れ

である。然り、人智は餘りに逆上して自負に墮した。而して此傲慢と名つけらるゝ腐敗紊亂の素菌たる惡德を生み出だした。傲慢は指麾し命令することを好んで、心服し順從することを嫌ふ。實に傲慢は不羈の父、反逆の母である。何時も又何事に於ても自已を萬物の中心となし、萬事の頂上に立つることを要求する。隨つて社會の秩序を紊し、人生の安寧を妨げる。雜多の迷謬、就中社會主義を生み出だす。人類の間に於ける平和、協同、友愛の永久の敵なる者は眞に此傲慢である。吾曹は目下歐洲の天地に血の雨を降らせつゝある否殆んど全世界を擧げて其渦中に捲込める大慘劇の演者の一に此傲慢の著しき實例を見るのである。古諺に所謂『太陽の下には新しき物無し』にて、吾曹が今日獨逸皇帝並に其國民に見る所の精神狀態

は、その酷似の類例を東洋の老大國支那に於て曾て見た。此國の皇帝は自ら稱して天子と謂ひ、神明の地上に於ける代表者と號し、萬國の民は擧げて之に臣事し之に貢租を納めねばならぬと自惚れて居た。此國民は又自らを以て世界最上の人民と爲し、德に於ても、智に於ても、有ゆる資格に於て他の凡ての國民に遙に優れる者であると信じて居た。縱し古代のアッシリア人、埃及人、波斯人、希臘人羅馬人より、今日の歐洲人、米國人に至るまでの文明が、支那の文明に遙に秀でゝ居たにもせよ、彼等支那人は其れに拘らず獨り自國の文明開化が他の萬國に冠絶して居ると考へた。支那人獨り眞個の人間である、完全の人民である、その他一切の人類は所謂夷狄の蠻民である、禽獸に近き賤民に過ぎぬ、彼等は宜しく天子と其直屬の

天民とに臣事し隷屬することを榮譽とし幸福とすべきであると信じて居た。此奇怪極まる傲慢の產物たる支那人の心狀を吾曹は今日獨逸皇帝並に其國民に於て見るのである。彼等は常に自ら誇りて『萬づに冠絶する獨逸』と稱へる。尤も其誇りは支那人の其れには及ばぬかも知らぬ。恐らく其程度が聊か低いであらう。其は當然有り得べきことで、縱令幾分なりとも獨逸人は基督敎の感化を蒙つて居るからである。吾曹は現に獨逸人の傲慢を見て居るが、彼等にして若しも曩日の支那人の如く敗北の運命に立至るやうになつたならば、其時には其心も和らぎ、其首も俛るゝであらう。彼等の傲慢も其處に至れば一場の夢と消去るのである。

扨は兎も角、吾曹が爰に指摘せんと欲する點は、科學が社會をも

人類をも道德的に近つけぬ、隨つて社會の大患、即ち吾人の患ひつゝ在る睽離、爭鬪、分裂の病を救治するために、何の用をもなさぬと云ふ事である。假令科學が如何に燦爛の美を極め、如何に隆々の勢を致しても、その獨力に委ね、其技倆にのみ任かせて置いては、現代の社會を救濟し、其の殘害をなしつゝ在る病患を醫治するに到底何の効力も無い。必ずや之が援助者、指導者、調節者となるものが無ければならぬ。其援助者、指導者、調節者の任に膺る可きものは、併せて之を索むるに羅馬加特力教會即ち聖公教會の外には決して無い。如何となれば此聖公教會獨り眞理に於る智識の統一を實現し得るからである。彼のみ獨り眞の神のものであるからである。彼のみ獨り權威に於る意思の一致を現出し得るからである。其最も激

烈なる反對者の言明したる所に據るも、『此教會獨り恭敬を教ふる最も美しき學校である、世に在る權威の尊重を教ふる最も優れたる道場である』。开は此聖公教會のみが完き愛に由りて心情の一致を養成し得るからである。汝等己れの如く互に相愛せとは是れ彼が標語である、父と我と一なるが如く汝等も亦一なれとは、是れ人類の救主基督の命ぜられたる言にして、彼が金科玉條として奉戴しつゝ在る所である。

科學對加特力教會

羅馬加特力教會に對して先入の偏見を抱ける或種の人々、若くは此教會に關して誤り傳へられたる人々は、往々彼が科學の進歩を恐

れて有ゆる力を盡し之を妨げることさへもあると批難する。然し此教會の組織に稽へ、其教育に徴し、將た其計畫、其經營、其盡力、其成蹟、一言にして蔽へば其歴史に見るに、恰も彼批難の正反對を立證して居る。此教會は科學的知識の發達の爲に如何なる困難をも曾て忌避したることなく、今猶決して逃避することが無い。彼は其力をも時をも金をも惜まずに、之が援助に抛てること無數である。看よ、第五世紀より第十五世紀に亘つて希臘羅馬に源を發した文明が北方並に東方の蠻人殊に日耳曼蕃族羅馬皇帝セザルは言うた、此蕃族の間に在りては强盗犯なるものが罪科とは視做されなかつたとの侵襲に逢うて如何に危機に瀕したかを。然るに之を救うたものは誰である。羅馬加特力教會即ち之であつた。此鐵血時代暴力時代に

於て、學校といふものは唯この教會の一手にあつたのみである。當年歐洲に於る總ての大學は皆此教會の設立したものであつた。然り其經營に係らぬものは一つも無かつた。加之、此教會は常に科學の研究を促し、絶にず之を奬勵し、有ゆる力を盡して之を援助した而して諸方面に於る其成功を嘉し、其發見を推賞した。實に彼は斯の如くに爲すことを「此宇宙を人間の探求に委ね給ひし」(集會書三の一一)神の叡旨に適合するものと認めて居る。彼は學者中の或者が毫も證明道無き假定說、尙適切に言へば謬れる臆說を、確認されたる眞理かの如くに主張して、それが彼れ教會の神より擁護を命せられたる幾多の眞理中の或ものに抵觸する場合に非ざる限り、決して學者間の論議や論難に容喙することは無い。若し彼が敢然として干涉し、否定

し排斥した場合があるとすれば、それは孰れも右に擧げた如き科學の假面を冠つた有害なる臆說のみに止まつて居る。

而して今日までの經驗に徵すると、さる場合に彼れ加特力敎會の執つた處置は何時も正當であつたことが證明される。例せばヘッケル及び其學派の者どもは、人も知る如くに、無神的進化說を唱道して、其實一種の假定說に過ぎざるものを、恰かも眞理と認められたる確說なるかの如くに主張した。然るに其說く所が羅馬加特力敎會の基礎的信條の一に牴觸せるによつて、敎會は其說を否認し、且之を排斥した。其時學者等の間には此處置に不平を鳴らす者があつて加特力敎會は文盲主義を執るものである、人の耳目を壅蔽して愚ならしめる者であると攻擊した。敎會は默然として何の答もしなかつたが、其決定は飽までも斷乎として之を維持した。然るに科學は爾來引續きて其步を進め、その進步の結果、科學其ものゝ力に由りてヘッケル說は見苦くも打倒され、敎會は依然として、眞理即ち眞成の科學と共に、儼として存して居る。特に第十世記の後半には、人種多源說が學者の間に頗る其猛威を振つた。之が又敎會の信條の一に牴觸するので、敎會は此說を否認し、且之を排斥した。此時にも同じく文盲主義を執るといふ批難を蒙つたが、敎會は其批難に耳を借さず、言ふ者には言はせて置くと、頓て眞成なる科學其ものゝ進步と同時に、敎會の敎義なる人種一源說は復び其頭を擡げて、見事勝利を占むるやうになつた。吾曹は斯る實例を幾許でも擧げることが出來る。それは古今に通じて多數にある。而して何時も同一の結

果を示して居る。既往已に爾り、今後も亦爾るに相違ない。過去は能く將來を保證するものである。

夫れ斯の如くにして羅馬加特力教會は眞理に於る智識の一致を實現する。彼は實に科學の爲に注意深き哨兵である。科學が其取るべき道を誤ると見るや、彼は忽ち警戒を與へて「氣を付け、汝は其進路を錯れるぞ」と叫ぶ。又彼は實に眞成なる科學の守護者である。其言ふ所に聽き從ふ多くの者は眞成の學者となり、然らざる者は相互に唯破壞を事とする臆說の似而非學者たるに過ぎぬ。試みに其眞成の學者中最近に屬する者の二三を擧ぐればかのパストゥール、ブランリイ、ド、ラッパラン、ファイユ、ル、ヴェリエーなどが之である。斯る學者は此外にも決して尠くない。

斯く言はゞ或は難ずる者があるかも知らぬ、果して羅馬加特力教會の其教權を用ゆる所が信仰と道德との問題に限るならば、かの有名なるガリレオの事件は如何である乎。彼は我地球が太陽の周圍を廻轉するといふことを敎へた爲に、教會の處罰する所となつたではない乎と。吾曹は容易に且つ喜んで此疑問に答へる。由來該事件に就ては教會並に教皇の不能謬權が些かも之に關與して居らぬ。先づ第一に地球が太陽の周圍を廻轉するといふ所謂地動說なるものは、ガリレオよりも百年以上の先きに已に發見せられたものである。其發見者は紀元一千四百七十三年に波蘭のトゥールンに於て生れた羅馬加特力教會の司祭ニコラ、コペルニック其人であつた。故に此學說はコペルニックの法則(システム)と呼ばれて居る。コペルニックは教皇パウ

叫第三世に上つた所の著書中に此法則を解説した。其時教皇は之を嘉納されたるのみならず、之を稱讃して、其功績に對し彼が位階をさでも陞げられた。夫より凡そ百年を降りて、紀元一千五百七十一年獨逸國ウルテンベルグのワイルに於てケプレルといふ人が生れた此者は教皇の命によりて伊太利國ボロギアの大學教授となつたが、彼は其處でコペルニックの學説を講じたるのみならず、更に之を敷衍し、且つ之に確固たる基礎を與へた。

而も當時の教皇は其功勞を認めて之に報賞を授けられたのである。然れば教皇も教會もコペルニックの學説、即ち地動説に向つて、曾て反對したることは無い。吾曹は尚反覆して言ふ、ケプレルにより て繼承され、當時の諸學校に於て容易に承認され、且つ支持された

る此學説は、教皇にも教會にも決して處罰されたることは無い、否事實は全く之が反證を示して居ると。

さらば當面問題の人ガリレオは如何であつた乎。彼は紀元一千五百六十四年伊太利國ピザに生れ、一千六百四十二年に歿したる者であるから、前に擧げたるケプレルとは正に同時代の人であつた。而して兩者共に同一の學説を講じたにも關らず、ガリレオのみ處罰された。その相異は抑も何に基づくかといふに、それはコペルニックもケプレルも共に學者として其學説を講述し、而かも爭論好きの態度無く、隨つて誰人も之に不安の念などを起す者が無かつた。然るにガリレオは成程卓絶せる學者ではあつたが、同時に頗る好爭的の人物で、鋭き舌鋒を振ひて右を擊ち左を衝き、世を嘲罵し、人を攻

擊し、剩へ威嚇するといふ風であつた。これが爲に彼を抑へて精神界の紛擾と分裂とを鎭め、學界の平和と一致とを回復せんとの目的にて、羅馬の檢邪宗敎裁判所は紀元一千六百十六年餘儀なくも彼を彈糺して其學說を唱道することを禁止した。殊に注意すべきことは此地動說なるものは當時猶學者間に於て一の假定說と看做されたるに過ぎず、一部の學者は之を贊するも、他の學者は之を拒むといふ有樣であつた事である。宗敎裁判所は此假定說と視られたる地動說を唱へることを禁止したが、而もガリレオの身を拘束するなどの事はなく、彼をトスカーの大使の友人の許に送つて、極めて安樂に其處に數週を過させたのである。蓋し檢邪宗敎裁判と雖も他の裁判と同樣の判官であるから時として誤判を下すことが無いとも謂へぬ。

ガリレオの學說を禁止したのは成程今日から見れば過失であつた。それは否む可らざることである。然し宗敎裁判所の第一に望んだ所は何よりも先づ學界の平和といふ事であつた。それが爲に斯る裁判を下したものである。

吾曹は尙爰に第十七世紀に於るヤンセニウス主義の爭論に就て聊か回顧したい。此時の主張には全く正當と認めらるゝ所由があつた而も檢邪裁判所は之に禁止の命を下したのである。それは敎義上の誤謬といふ理由ではなくて、唯敎會の主權者が、紛擾せる人心を鎭靜するために、全世界に沈默を命じたからといふ理由であつた。

要するにガリレオは決して牢獄に投ぜられたる事なく、況んや拷責を加へられたることなどは夢にも無い。その働きを妨げられたる

事もなく、その著書の破棄されたる事も曾て無かつた。彼を處罰せし者は敎義上の不能謬權を有する敎會でもなく、全公敎會の敎導者としての敎皇でもなかつた。尙それのみでないガリレオの處罰された當時の敎皇ウルバノ第八世は豫て彼と相識の間であつて、彼を愛し彼を重んじ、その科學上の諸發見に就ては親ら詩を作りて之を嘉奬されたことさへもある。(H. de l' Epinois の著 Piece du procès de Galilée『ガリレオの訴訟書類』及び La question de Galilé『ガリレオ問題』を看よ)。

智情意の一致と加特力敎會の權能

吾曹は已に斷言した、羅馬加特力敎會即ち聖公敎會獨り全き眞理

と、全き權威と、全き愛とを保有するが故に、智識、意思、及び感情の迷謬無き十全なる一致を能く實現し得ると。今は一歩を進めて聊か其所以を詳說しよう。

今を距ること凡そ二千年の昔、古代亞細亞の一角なるパレスチナに一個の人物が現れた。其者は公衆の前に語つて云うた『予は聖者である、汝等の中誰か予に罪あるを認むるものぞ』と。此人物や最も純潔、最も謙遜、最も仁慈、最も柔和、最も明達、最も崇高なる者であつた。故に彼は憚る所なく公言した『予の聖者なる如く、汝等も亦聖者なれ』と。此言語をして若しも他の人の唇より出でしめたならば、如何に奇怪に聞かれたであらうか。然るに彼は二十回も之を反覆したに關らず些も其品位を損ふことなく、毫も其價値を傷

くることが無かつた。此人物は其一生を通じて唯の一瞬間も己が無比の完德より發する明快透徹の斷言を躊躇する如きことが見られなかつたのみならず、何時も、又到る處に、罪に對する最も强き觀念を有して居ることが認められた。さればこそ彼は人類全體の擧げて罪を悔ゆることを渴望し、衢に立ちては衆に勸めて『汝等悔い悛めよ、罪を償へよ』と呼號することに其終生を費したのである。彼は瞽者の眼に、聾者の耳に、將た中瘋患者の四肢に觸れて、不可思議なる靈能を顯し、其病患を醫したが、彼れの眼中に存するものは唯其者等の罪のみで、諭して言ふ所を聞けば常に『往け、心を安んせよ。汝等の罪は赦されたり。往きて再び罪を犯すこと勿れ』と言ふのみに止まつた。吾曹は謂ふ、此人物は已れ自らの爲に微塵も罪の

赦しを必要とする懸念を有さなかつたと。彼は曾て一たびも其胸を打ちたること無く、曾て一滴も後悔の涙を流したることが無い。彼が熱涙を濺いだのは唯他人の罪の爲のみであつた。其譬へ方なき苦痛を感じた橄欖(グツセマニ)の園の中にも、其悲愁せる天と冒瀆せる地との間に十字架上の死を遂げた髑髏(ゴルゴタ)の山の上にも、彼は一言一思一行として毫も悔恨したることが無かつた。彼は嘗て其弟子等に敎へて曰うた『汝等は斯く祈れ（玆に注意せよ我等と言はずして特に汝等と言ふ）天に座ます我等の父よ、願くは我等の罪を赦し給へ』と。而も彼れ自身の爲には一たびも斯く祈れることが無かつた。此人物は常人と異ることなく生存し、死亡し、惱み苦み、誘惑を受けたことさへもある。罪に對しては最も强く忌み嫌うたが、而も常に罪人に圍繞さ

れ、何時も何處にも、如何なる場合にも、已れ自らの救靈に秋毫も其心を煩はしたことは無いが、而も絶にず全人類の救靈に就ては渇する者の水を求むる如くに熱望した。彼は清淨無垢晴朗安和の本心を有して居た。其崇高なる安和には後悔も、痛恨も、將た何の疑懼をも宿さない。其胸の純潔なる呼吸、其眼の言ふ可らざる清朗、其靈の神々しき沈着、此等のものは其人格に於て絶に間なく吾人に示すに絶對の眞、無限の愛、無垢の美、無染の淨、極致の聖を以てする。彼は天上の美を敎ふる其敎義を宣べ、頗る驚異すべき言語を以て之を説明した。さればこそ之を聽ける民衆は驚きの眼を睜りて、其口より次の如き言を洩らしたのである。曰く「未だ曾て此人の如くに語れる者を見ぬ」と。豈啻にそれのみならんや。未だ曾て斯ま

でに高尙なる思想の一言も吐かれたことは無い。尙未だ曾て此等の言語斯までに理想化され、思想に由て變容されたことは無い。彼れの言語は文學の精髓にして又その生命である。實に其は神の文章である。其譬喩は適切にして、其敎は確實且つ深遠である。彼は絶に怒れることと無く、不變の温容を以て能く其反對者、其嫉惡者を閉息せしめた。其答辨には感嘆すべき沈着、冷靜、機智、謙遜が輝いて更に乘ず可き隙が無かつた。彼れの語る所にも、又其言ひ方にも凡て聽者を首肯せしめ心服せしむる圓滿なる道理と常識とを具へ、尊敬の念と服從の心とを起さしむる決斷の安全と、温和の調子と、偉大の權威とを有して居た。實に其卓絶崇高なる雄辨は能く人々の意思と感情とを引きつけ、之を結びつくる力があつた。其唇を衝い

て出づる言語は幼兒にも老人にも、將た眼に一丁字無き無學者にも容易に理解され承認さるゝ程簡明、自然、通俗、眞率であると同時に、頴才の智者、俊秀の學者にも吃驚され、感嘆さるゝ程に偉大、崇美、幽玄、深奥であつた。其謙讓には矯飾無く、其懇切には柔懦無く、其自重には尊大無く、其清貧には不平無く、衒氣無く、又全人類の平和一致協同及び幸福に對する愛には限極が無かつた。彼は爭議も抗論も又深究もしなかつた。唯有ることを有りの儘に認めて居た。彼は神の有ゆる知能に通曉し、宛から其等知能の裡に生れ、其光榮の間に育てるかの如く、尙一言に約ひれば恰かも自已の物なるかの如くに、何の雜作もなく極めて自然に之を語つた。其降生に先つこと幾百年の以前より、數多の預言者に依りて告げられ、此世

の萬民に大旱に於る雲霓の如くに待ち望まれたる預言の事項を、彼は悉く其一身に於て成就した。其死後三日目に復活することを豫め告げ置きて、全人類の救贖の爲に十字架の上に最後の息を引取る時「我事終れり」と叫んだのは、是れ正に彼が此世に來れる所以の一切を遂行し了つたとの意義であつたのである。

以上の事は總て何に由りて行はれたかと云ふに、此人物は神其ものであるからであつた。神の神、眞の神の眞の神であるからであつた。之が我等の救贖者、我等の主なる耶蘇基督である。

世に宗教の創立者と謂はるゝものは尠からず現れた。釋迦にせよ摩哈默度（マホメット）にせよ、其他無數の者、孰れも神若くは佛より特に遣された者の如くに自任した。然し彼等の中誰一人自ら已を神であると公

言した者は無い。彼等は敢て斯く言はなかつたのではなく、言ふ資格が無かつたのである。假令言うても信じられなかつたに相違ない。然るに獨り我温良なる救主基督のみは自ら神であると公言した。彼は實際神である故その公言は些かも不思議でなく、又それを信じられもしたのである。福音の記者も同じく基督の神たることを聲明した。彼等は夙に基督がエムマヌエル即ち「我等と偕に在ます神」であることを學ひ、又最と高き者、天より降れる主、一切の人を審判せん爲この世の終に再び來るべき神其ものであることを常に聽いて居たのである。

さて基督は其救贖の爲に已が一命をまで抛つほど深く人類を愛された。それは已に吾曹の語つた所である。夫れ愛は自からにして警

戒と配慮とを生ずる。別言すれば深き注意を傾け且つ常に目を放たざる攝理といふものが自から其愛より出でゝ來る。況んや神なる救世主は人間が超自然の生活に馴致せらるゝ爲には、之を敎へ之を導くべく、謬らざる指導者の要あることを稔知せらるゝに於てをやである。吾曹は爰に忘れてならぬことがある。开は宗敎々育に於ても他の凡ての敎育と等しく、活ける人間の精神と活ける人間の精神とが相接觸するにあらざれば、竟に何の功果をも收め得ぬといふことである。書物の如きは如何に完備せるものであつても、それのみにては、敎育の爲にも、確信の爲にも、單に機會を與へ出發點を供するに止まる。吾曹は聖書の如きに於てさへ何時も其例を見るのである。されば宗敎敎育の如き複雜にして深奥なる事業に在りては、到

底書物の力に及ばざるものがあつて存する。宗教上の眞理を會得し活ける精神を修得せしむるが爲には、他の活ける精神、確實にして安全なる精神が無くてはならぬ。言を換へて云へば、有ゆる微細の點にまでも立入りて薫陶の功を擧ぐる爲には、現實にして聰明且つ無謬の智識なるものが無くてはならず、又その教ふる者と教へらるゝ者と双方の間に相感應する愛が能く眞理に合する爲には、生命を有して皷動しつゝある温情なるものが其處に無くてはならぬ。

成程、單に書物のみに依るも、回教徒の回教聖典に於るが如く、或種の統一をば或は有することが出來るかも知れぬ。されど斯は生命の無き氷結したる統一である。此事は既往の經驗が明かに立證して居る。又基督新教徒の聖書に於るが如く、或種の活動をも或は實

現し得るであらう。然し其活動なるものは混亂、疑惑、不調和、無秩序のものに過ぎぬ。此事も亦從來の經驗が十分に證明して居る。此の如き道によりては到底健全なる、强壯なる、潑溂たる生命を有することは不可能である。鞏固なる、確實なる、不動の眞理を有することも、感情や良心の平靜安和を保つことも望まれぬ。隨つて社會の一致、協同、友愛、平和を來すことは決して出來ぬ。人類に對して全幅の愛を注がれた基督は、その神の叡知と無限の豫知とによりて、此等の事を悉皆洞觀して居られた。されば之こそ彼は其天に歸り昇るに先ちて、活ける精神、献身的精神を有する一の團體を此世に貽さうと思はれた。その團體なるものは決して新なる教義を立てず、新なる信條を設けず、唯その寄托されたる信仰を忠實に守護し

使徒等より傳はれる教旨を精確に解釋するに止まり、其事業を敷衍し且つ發展せしむる爲には、世の終まで日々僧に在る（馬太二八の一八乃至廿）所の神の援助に依りて、誤謬に陷る慮無きものなることを要する。基督が地上の生活の末期に於て貽さうと思はれた團體は斯る性質のものであつた。之を貽さなければ彼は先見の明を缺ける者のやうである。其事業も完備せるものとは謂ふことが出來ぬ。果して彼は此潑溂たる生命を有する團體を設立して之を世に貽された。この基督によりて立てられたる團體が即ち羅馬加特力教會、一に聖公教會と呼ばるものである。此教會の有する卓絶なる神聖、諸善に於る無盡の豊富、公けにして完全の一致、侵す可らざる不變不動の安定などは、孰れも其神より受けたる使命の信す可き廣大にして永久なる理由である。否むべからず拒むべからざる證據である。

羅馬加特力教會は實に神の事業である。耶蘇基督の事業である。基督は最も正大なる最も公明なる語を以て、特に其弟子ペトロに向ひ「汝はペトロ即ち磐石なり、我此磐石の上に我教會を建てん、地獄の門は之に勝つことなかるべし（マテオ六の一六八及一）」と仰せられた時に、之に基礎を與へ、一の團體として之を建設せられたのである。されば其基礎として其首領としてペトロを有せざる總ての教會は之を基督の教會と視ることは出來ぬ。請ふ特に注意せよ、基督が我教會といふ語を用ゐられた時に如何なる語を採られたかを。彼は其時複數を示す語を用ゐずして、明かに單數の語を使はれた。故に眞成なる基督の教會と謂ふべきものは必ずや幾つも有るものに非ずして、唯一

つのみのものでなければならぬ。隨つて其教會の内には、羊群即ち信徒の團体唯一つ、牧者即ち統御者唯一人（ヨハネ一〇の一六）、神唯一體、主唯一人、信仰唯一つ、洗禮唯一つ（エフェソ四の四及五）、の外は無い筈である。又隨つて其教會の信徒なる者は基督と父なる神との一なるが如く、互に相結びて一とならねばならぬのである（ヨハネ一七の一一及二〇、二一）。是が即ち神自身の命ぜられたる所であつた。神なる基督は尙その使徒等即ち其教會の最初の先導者等に向つて告げられた「總て汝等が地上にて繫がん所は天にても繫がるべく、總て汝等が地上にて釋かん所は天にても釋かるべし（マテオ一八の一八）、天に於ても地に於ても一切の權能は我に賜はれり、故に我父の我を遣はし給ひし如く、我も亦汝等を遣はす也（マテオ二八の一八及ヨハネ二〇の二一）」と。之を釋けば、我が父より受けし同じ權利と我が

負へる同じ義務とを授けて、我汝等を我代理として遣はすといふ意義である。さればこそ「汝等に聽く人は我に聽き、汝等輕んずる人は我を輕んず（ルカ一〇の一六）。若し我教會に聽かざる者は異邦人税吏の如き者と視做すべし（マテオ一八の一七）」との嚴命をさへ下されたのである。

是に由つて觀れば、此地上の教會は基督自身及び其神業の延長されたるものと謂はぬばならぬ。而して此地上の教會の最上首長たる者は使徒ペトロであつて、其以外には斷じて無い。何を以て爾か云ふかとならば、基督が天國の鍵を委托されたる者はペトロ唯一人であつた（マテオ一六の一八、一九）。事實に見るも彼が首に立てる團體の鎖鑰を握つて居た者は彼れの他に無かつたのである。又基督が「我羔を牧せよ、我羊を牧せよ（ヨハネ二一の一六、一七）」語を換へて言へば、我教會の一切

の信徒並に其司牧の任に膺る聖職者を支配せよ、と命ぜられたのも同じくペトロ唯一人にであつた。尙また基督が「我汝の爲に汝の信仰の絶ねざらんことを祈れり、汝何時か立歸りて汝の兄弟を堅めよ（ルカ二二の三二）」、即ち汝が信仰と道德とに關する事を敎ふる場合何時も謬り無からんやう我汝の爲に祈つたと曰はれたのも、是亦ペトロ唯一人に向つてであつた。是れ吾曹がペトロを以て此地上の敎會の最上首長であると斷言する所以である。

斯て基督は其敎會の首領を選定し終り、次で其首領と首領の朋輩一同とに向つて「汝等往きて萬民に敎へ、父と子と聖靈との御名によりて之に洗禮を施せ。さて我は世の終まで日々汝等と偕に居るなり（マテオ二八の一八、二〇）」と命じ且つ告げられた。此に於て使徒等は立つて四

方の國々に散り往いた。故に使徒等は基督より遣はされたる使節である（コリント後書五の二〇）。爰に聖博士ヒラリオの言を借りて云へば、「眞理の柱にして且つ基なる敎會（チモテオ前書三の一五）」は亦基督の口其ものである、と謂うて可い。

之を要するに、基督の敎會は同一の信仰を有し同一の秘蹟に與かり同一の牧者に從ひ、別けても其首領なる敎皇に服從しつゝ在る總ての信徒の一大團體である。此基督の敎會は即ち羅馬加特力敎會是であつて、その外には斷じて無い。如何となれば此羅馬加特力敎會のみ唯獨り基督の其敎會に要望せらるゝ徽號、即ち一、聖、公、宗傳といふ四大特徵を有して居るからである。實に羅馬加特力敎會は一である彼は互に相分れ相爭ふ社會の滅亡すべきこと（マテオ一二の二五）を知

つて居るから、其教義も、其道德も、其規律も、其政治も、實際に能く統一せられて、都て皆一の事實を擧げて居る。彼は實に基督の欲せらるゝ如き完き一致を能く保有して居るのである。次に又羅馬加特力教會は實際に聖である。先づ第一に其創立者なる基督が聖者中の聖者である。而して人々を成聖する爲に此教會は建てられた。其教義も、其道德も、其秘蹟も、皆全く聖なるもので又其信者の多數も事實聖者となつて居る。使徒パウロは說いて言うた「基督は其教會を愛して、之を聖ならしめ、汚なからしむべく、之が爲に已を付し給へり（エフェゾ書五の二五乃至二七）」と。尙又次に羅馬加特力教會は實際に公即ち普遍である。彼は實に萬國萬代に亘り、又萬人に普く及んで居るパウロの言に曰ふ「總ての人の爲に祈れ。這は一切の人の救はれんことを望み給ふ汝等の主なる神の嘉納し給ふ所なればなり（テモテオ書二の一、三、四）」と。此教會は其教義が洽く全世界に宣傳せられ、國の文野を問はず時の古今を論せず、人種の黑白黃赤に關らず、孰れも皆地上に於る基督の代理者にして其唯一の首領なる羅馬教皇を承認し、靈界の元首と仰いで之に服從し、同一の信仰、同一の希望、及び同一の誡律といふ聖き鍵鑰によつて、皆彼と一致しつゝ在る夥しき兒女を世界の到る處に算へて居る。斯の如くにして彼は事實の上に其公即ち普遍なることを證明して居るのである。最後に羅馬加特力教會は疑も無く使徒宗傳である。彼は實にペトロの上に建てられ、其他の十一使徒をも基礎として有して居る。例せば現に日本帝國を統治し給ふ今上陛下が、此國の最初の皇帝なる神武天皇の直系に座はして、ま

た正統の帝位繼承者で在はさるゝから、神武天皇と同一の尊位、同一の權能、同一の大權を保有せらるゝ如く、現代の羅馬加特力教會もその首領なる現羅馬教皇ベネヂクト第十五世は聖ペトロより第二百六十代目の後繼者であるから、其最初の教皇ペトロと同一の權能同一の權利、同一の尊位を保有し、又基督のペトロに向つて告げられたる『其信仰の絶えざる爲に祈る』との約束に基いてペトロと同一の不能謬權(インヴァイヒルテ)をも有して居る。而して此教會の司教等も皆使徒等の眞成なる相續者であるから、今日の羅馬加特力教會なるものは慥かに使徒時代に於る最初の教會と同一のものである。換言すれば實に使徒宗傳の教會である。夙に第四世紀の頃、伊太利國ミランの司教にして教會の大博士なる聖アムブロジオは、當年の基督教徒に向ひ

『ペトロの在る所が眞の教會である』と教へて言うた。その意味はペトロの正統なる相續者羅馬教皇の在る所が基督の眞正なる教會である、それ以外には決して無いといふ事である。吾曹は第二十世紀の今日に於ても亦同樣に言はねばならぬ。曰く『ペトロの正統なる後繼者羅馬教皇、即ち加特力教會の現首領ベネヂクト第十五世の在る所、唯之のみが基督の眞正なる教會である。これ以外に眞の基督教會なるものは斷じて無い』と。

夫れ耶蘇基督は天に還り、人間なる十二の使徒は他の人々と同じく死歿し去つた。而も基督の教會は曾て彼れの聲明せる如く世の終まで繼續すべきものである。されば無論开は彼等の後繼者に依りて繼承せられねばならぬ。請ふ注意せよ、羅馬加特力教會を除いて他

の如何なる教會か能く其後繼者であると宣言し得る者ぞ。看よ加特力教會以外の所謂基督教會なるものは、孰れも其創立の年代が多くか少くか後世のことに係つて居る。今や其分派は千を以て數へられ僞りて基督教會と呼ばれて居る此等の教會は、唯單に其信念の基礎として新約聖書にのみ依ると稱へて居る。之について吾曹は已に前章に語つて置いた。羅馬加特力教會は彼等が唯一の倚憑とする其新約聖書よりも尙先きに設立せられて居る。此教會が既に設立せられて廣く世に弘まつてより後幾星霜を經て、新約聖書は始めて世に現れたるものである。人々が之を受けたのは實に此教會の手からであつた。爰に吾曹は斷言する、羅馬加特力教會は實に基督並に使徒等より傳はり來つた唯一眞正なる教會であると。但し吾曹が上來屢々

引用せる『不能謬』といふ語に就ては尙說明を要するものがあるであらう。

抑も基督は何の爲に謬ること能はざる教會、即ち不能謬の教會を創設した乎。开は其教義信條を一點一畫の瑕瑾も無く完全に世の終まで此地上に永續し保存する爲であつた。又主我的の個人主義、智識の混亂、意思の分離、及び人間社會の階級間に於る嫉視反目、即ち社會的競爭、此四つの危害を永久に排除する爲であつた。此後者に就ては尙聊か註解を要する。先づ第一主我的の個人主義、之は例せばかの個々の人々の頭數ほど其分派を有する基督新教の如きもので、各人各個をして皆自家の見解にのみ信賴し之を固執せしむるものである。次には智識の混亂、之は種々雜多の相容れざる自說を

社會に流布して紛糾に陷らしむる前記個人主義の結果で、其處には最早一の確實をも無からしむるものである。尚又次には意思の分離之は權威に由りて意思の結合さるゝことなく、隨つて叛亂と革命とを醸釀するものである。最後に社會の階級間の嫉視反目、之は前記の個人主義並に智識と意思との無政府的混亂の結果より來るものである。

かるが故に此地上に於る敎會の使命なるものは、基督の敎を一點一畫の增減も無く、又之を變化せしむることも無く、完璧の儘に相傳して、其敎義を解說すると共に、個々の人々の間に必然起るべき敎論に正確なる結論を與へて、其論爭を解決し、以て智識にも意思にも平和、一致、調諧を得しむるに在るのである。此成果に達する

爲、言ひ換ふれば、吾人をして現世に在りて宗敎的眞理を保有することを確信させる爲には、吾人の間に不能謬權即ち謬ることを能はざる權威なるものが無ければならぬ。神の叡智其ものである基督は、其敎會即ち羅馬加特力敎會を創設して、此不能謬權を設定せられた彼は先づ第一に其敎義を宣傳すべくペトロ及び他の使徒等に與へられたる委任を以て、次には「彼等と偕に止まりて一切の事を敎ふべき眞理の靈を彼等に遣はし（ヨハネ一四の一六及一六の一三）」、彼等と偕に世の終まで在るといふ約束に由りて此權を立てられたのである。されば精神界の一致と眞理とを誤謬に陷る虞なく保存することが、是れ即ち此世に於る敎會の唯一なる任務である。若しも假に此敎會が信仰の事、道德の事に於て謬ることが有るとするならば、亦は已に此世界に確實に

して疑無き宗教なるものは存在せぬといふことになる。それは當然の結論であると謂はなければならぬ。請ふ注意せよ、吾曹の言ふ意味を誤つてはならぬ、信仰と道德とに關する不能謬權なるものは、新なる信條を創設するが爲に神が其教會に授けられたと云ふのではない。唯基督並に使徒等より承け繼ぎたる教義を精確に擁護し、人間に有り勝ちなる誤謬に陷ることを無く之を説明するが爲に與へられたといふのである。

以上の理由によりて、羅馬加特力教會の教ふる教義といふものは必ず不變不易なるべき筈である。然り、實際不變不易である。それは基督の教へたる儘の教義である。教會は其教義に一點一畫だも添加したことが無い。否、之に添加することは彼の力に能はざることである。教會はさる權能を有して居らぬ。彼は唯基督並に使徒等より承け繼ぎたる所のものを説明し宣傳するに止まることを斷じず公言して居るのである。

さて然らば其教會の不能謬權は誰に依りて行使せらるゝ乎。その機關は如何なるものである乎。其一つは公教議會である。其公教議會は教皇の監督の下に全世界の司教等より成立したるものでなければならぬ。他の一つは教皇自身である。教皇が此權を行使する場合は、聖ペトロの相續者として宣言することを要し、又全世界の教導者、牧者として、一部の者のみに向つてゞなく、又或特別の教會のみに限らず、全世界一般の公教會に宛てゝ宣言することを要する。而して其宣言する事項は嚴密に信仰若くは道德に關する決定であつ

て、それが又蓋然的のものでは固よりなく、確認的のものゝみでもなく、全信徒が擧りて是非とも承服せねばならぬ信仰個條として布告さるゝ場合にのみ限るのである。

教皇若くは教會は斯の如き決定を與へて新なる信條を立つるのである乎。否々、前にも述べたる通り斷じて否。教皇若くは教會の宣言する所は唯單に其決定の事項が最初より基督並に使徒等に由つて告げ教へられたる點のみに止まる。尙言へべ之は實に基督の教である、否むことの出來ぬ信仰個條である、强ひて否めば異端者たるを免かれぬといふ點のみに限る。加之教皇若くは教會は此種の決定を下すに先だち、注意に注意を加へて、聖書に錄され聖傳に傳へらるゝものを始めとし、公教議會又は特殊會議の決定せる事項、教父並

に教會博士等の記錄、歷史、その他全世界に散在する教會の意向等に徵して、嚴密に愼重に其教旨の存する所を探究する。而して此等一切の參考資料と一切の保證とを其手に握りて後、乃ち基督自身の明確なる約束に由る聖靈の偕に在る時でなければ、其決定が實際眞に基督並に使徒等より傳來せる信仰個條であると、不能謬權發動の法式を以て宣言することは決して無い。教皇及び教會の不能謬權とは夫れ此の如きものである。單に是だけのもので、何の奇怪も無ければ何の不思議も無い。全く自然で、全く當然である。尙全人類一般の意識感情を安んずる爲には是非とも斯くなくてはならぬのである。而も羅馬加特力教會は、教會としても教皇としても此種の定決を下すことは極めて稀有のことである。其創立より今日に至るまで

凡そ一千九百餘年の間、僅々二回の外には未だ曾て此事の有つたのを見ない。その一は至聖童貞女マリアの無原罪懐孕に就て、他の一は教皇の不能謬に就て、唯是のみであつた。而してそれは奇想天外といふ如き法外の事ではなく、孰れも容易に同意せらるべき性質のものであつた。其事は使徒時代より、極めて僅かな個々の異論を除いて、全教會の已に信じ居たる所、夙に認め居たる所であつたから其確證を添ゑて此二つの決定を宣言したのは、教皇も教會も決して新なる教義を立てたものではない。その目的は唯之に由りて、此教義上の二要點を猛烈に攻撃せる當代の異端者の迷妄を根本的に打破して、以て加特力教信徒に心を安んじて眞理を確信せしめる爲のみに在つたのである。此處置は基督教の初代第一世紀の末葉に於て、當時の異端者が唱道せる邪説を排撃する爲のみに、其福音書を著した使徒聖ヨハネの顰に倣つたものである。

世には往々説をなして曰う者がある、歴代の羅馬教皇中には自ら異端に墮した者がある、少くとも一人は慥かに有つた。即ち紀元六百廿五年より六百三十八年に亘つて聖座を占めた教皇ホノリウス第一世は其れであると成程、聖ペトロより今日に至るまで歴代の教皇中に、それが唯一の場合として擧げられ、又尤もらしく視られて居る。然し之を批難する者の言ふ所には何の根據も絶ゑて無い。第七世紀の交、基督は神人二性を有するが而も唯神の一意のみであるといふ所謂二性一意論なる異端が大いに蔓り、之が爲に人心は甚だしく動揺した。當時の教皇ホノリウスは深く此情勢を憂へて、信徒間

の潰裂を防がんと欲し、乃ち二性一意論の異端を駁擊することを禁ぜんとて、二つの書簡を一部の教會に宛てゝ贈つた。それは慥かに過まれる要愼であつた、餘りに神經過敏の處置であつたと謂はねばならぬ。コンスタンチノプルの第三公教議會も、該教皇の後を繼いだ數代の教皇も、此事は有體に指摘して居る。然し此時の事に就ては、教皇の不能謬權が些かも關係して居らぬ。何故かといふに、第一にはホノリウスが此時所謂Excathedra（エクスカテドラ）の宣言をしたのでない。即ち全加特力教會の教導者たる資格を以て語つたものではなかつた。第二には彼二通の書簡に於て彼は何事をも教へたのでない。唯沈默することを命じたに過ぎなかつた。第三には彼は其書簡を全加特力教會に下したのではなく、單に一部の教會、即ち二つの教會に宛て

たのみであるからである。

兎角、教皇の不能謬といふ教義を提唱すると、異端者離教者の間には忽ち忿怒の叫びが湧き起る。曰く、何者の狂愚ぞ世に罪を犯し得ざる人ありと爲すと。吾曹が前に擧げたる條件の下に教皇は不能謬であると言ふのは、何も教皇は罪を犯されぬ者であるといふ意味ではない。教皇と雖も無論他の人間と等しく人間である以上罪の無い者とは謂はれぬ。學問に於ても、政治に於ても、將た私人的教導者としても、教皇は一般の人間と同じく謬りの有るべき者である。時として又實際に謬つた例もある。基督より以來現教皇ベネヂクト第十五世に至るまで、ペトロの座を占めし二百六十代の教皇中、その四五の教皇の如きは私人としてさへ餘り尊敬せらるべき者ではな

かつた。羅馬加特力教會は未だ曾て教皇が罪を犯し得ざる者であるなどゝ教へたことは無いのである。然るにも關らず、教皇は過失の無き者であると主張するとか、或は教皇は濫りに種々雜多の新なる教義を作りて隨意に之を教會の信仰に附加するとかいふ讒誣は、今猶頻に行はれて居る。就中基督新教徒の間にはそれが殊に熾んである。

未だ數個月を出でざる以前であつた。吾曹は某新教派の一牧師の口より出でたる言を耳にしたことがある。其人の名は今忘れたが、その言を聞いた者は恐らく吾曹の外にも多人數あらう。蓋し吾曹の觀る所に據れば其人は頗る眞摯の好人物のやうであるが、而も驚くべきかな、彼は加特力教徒を以て教皇が罪を犯し得ざる者。謬り能

はざる者、（彼は此二語を混同して居る）なることを信ずるのみならず、聖母マリアを神拜し、諸聖者の塑像畫像等を禮拜する者と爲し要するに加特力教は偶像教であるなどゝ眞顏に語つて居るのである

吾曹は左に數端の據證を擧げて該牧師君に答へたい。

加特力教徒は君の解せる如き無謬の教皇をば認めて居らぬ。況や其が罪を犯し得ざることをやである。吾曹をして言はしむれば、反つて彼等新教派の人々こそ自ら已の不能謬なることを主張する者である。看よ　彼等の一人は最近自已の一派を開いた。他の甲乙丙丁幾多の人は曩日已に幾多の派を立てゝ居る。而して其各派は皆在來のものと各々異つたことを唱道し主張して居る。其又各派に屬する新教信者なるもの迄が孰れも聖書を讀みて、教皇以上の不能謬を自

家の爲に要求し、又事實上自家を不能謬なるものと爲して居る。何を以て爾言ふかとなれば、彼等の總てが各々其想像の結果なる奇怪の解釋を聖書に與へて、而も些の暗點無く聖靈より敎へられたる神の純粹眞理の表現なるかの如くに自信して居るからである。斯の如きことは斷じて敎皇も語らざる所である。曾て爲しもせず、又敎へもせぬ所である。今後も亦必ず言ひもせず、爲しもせず、敎もせぬに違ひない。敎皇は彼新敎派の人々よりも謙遜である、謹愼である。最初基督及び使徒等より敎へられたる所のものを信じ、且つ敎ふるだけに滿足して居る。換言すれば、曾て聖パウロの語れるが如く、彼は信仰の寄托物を大切に守りて（チモテオ六の二〇）之に一點をも附加せず、又一書をも削除せず、完全に擁護して往きさへすれば それで

足ると爲して居るのである。唯是のみのことである。

次に聖母マリアを神として尊拜すると云ふに至つては、加特力敎徒を誣ゆるのも實に太甚しきものである。彼等加特力敎徒は如何なる方法に於ても曾て聖母を神として拜んだことが無い。加之彼等は之に神としての尊拜を捧げるのは一種の瀆聖の所爲、一の罪惡であると謂うて居る。彼等は聖母が人間に過ぎざることをも、また聖母と基督との間には人と神と、有限と無限と、被造物と造物主との間に存する相異の有ることをも能く承知して居る。故に彼等は聖母を神として尊拜することは決して無いが、而も其心を傾け力を竭し他の被造物に優りて之を愛敬して居るのは事實である。それは又何故かと云ふに、聖母は神の恩寵に充たされ、有ゆる婦人の中には格別

にも祝せられ、主即ち神が彼女と偕に在る（ルカ一の二八）とまで仰せられた
る最も完全にして最純潔なる、又最も至聖なる者であるからである
それのみでない。聖母は尙聖靈の恩寵を受けたる者で、其血により
て基督に人骸を與へ、幼冲の基督を鞠育したる（ルカ一一の二七）耶蘇の母で
あり（マテオ一二の一一）又萬代の民が至福者と稱ふべき者（ルカ一の四乃至五五）でもある
からである。尙その上に、基督が聖ヨハネを我等の總名代となして
聖母を我等の母たるべく與へられた（ヨハネ一九の二六）からといふ理由もある
眞に彼等加特力教徒は基督を愛する者である。其母を愛敬せずして
爭で其子をのみ愛することが出來ようぞ。されども吾曹は反覆して
言ふ、加特力教徒は斷じて聖母を神とはなさぬ、彼等は基督に向つ
て祈る場合『我等を憐み給へ』と誦へるが、聖母に向ふ時には『只

我等の爲に祈り給へ』といふ語を用ゆるのみである。是は全く同じ
でない。其間には歴然たる差別があるマリアは耶蘇の母であるから
神の側に在りて最も有力なる傳達者であることは疑無いが、我々に
恩寵を與へることも、我々の過失を赦すことも、それは彼女自らの
力ではない。彼女は唯吾人の爲に祈り求めて與るゝのみである。
更に加特力教徒は諸天使諸聖者をも愛敬する。されど开は唯諸天
使諸聖者なるものが神の味方であり我等の兄弟であつて、我等の爲
に祈り與るゝからといふ理由に止まる。
尙前後に、宗教上の塑像畫像に就て、加特力教徒は大いに之を重
んじて居る。宛かも臣民が帝王の眞影に對する如く、子が親の肖像
に向ふ如く、又兄弟が其兄弟の寫眞に於るが如く、之を重んずるこ

とは事實である。然し彼等は其塑像畫像を以て直接己の愛重し尊敬する對象其物と爲すのではない。唯其處に現はされて居る人物を愛敬する間接の便宜とするに過ぎない。それは自然のこと、合理のこと、正當のことではあるまい乎。

尙序に吾曹はかの新敎の牧師君に一言したい。君や君の一味の人々が誣ふる如くに、羅馬加特力敎は微塵も偶像敎の譏りなど被むるべきものではない。諸君は世に謂ふ食はず嫌ひの亞流であつて、未だ曾て其眞味を味はつたことも無く、徒らに只排斥するものである然れども吾曹は堅く保證する、加特力敎徒は諸君の誤解や讒誣や攻擊に辟易する者ではない。彼等殊に其宣敎師は所謂「善は喧囂せず喧囂は善を爲さず」といふ古い諺を能く理會して居るから、噪鬧もせず、喧囂もせず、只謙遜に、只懇切に、能ふ限りの心と力と方法とを盡して、基督の完璧なる敎を傳へ、十全の眞理を保有することを意識させて、及ぶだけ多數の人靈を救ふことに努めて居る。それで彼等は幸福であり、また安心して居るのであると。慥かに洋の東西を問はず如何なる國土、如何なる國民の間にも、反目、嫉視、不和、分裂を來たさしめし者は彼等でない。その過去その現在は明かに之を立證して居る。將來も亦必ず從前の如くであるに相違ない。吾曹は斷々乎として之を保證する。

結論

太古幾多の預言者なるものがあつた。彼等は神より遣はされ、神

の默示を受けて、遠きは二千有餘年、近きも數百年の以前に在りて他日基督が人類の救主、眞理の再興者、諸國民の間に於ける平和の恢復者として、此世に來るべきことを豫言した。其預言者等は單に基督の降生を告げたるのみならず、尙も其生涯の如何なるものなるべきかをまで仔細に之を語り聞かした。斯て彼等の告けたることは後年地上の人民が容易に且つ安全に之を承認し得たのである。其預言者等の中に於て特に有名なる者は、基督の降生前八百年の頃に生存したる預言者イザイアこれてある。此預言者の豫言は事蹟以前の福音とも視られるほどに明白で、且つ詳細である。さて此イザイアは未來の救世主に就てなしたる豫言の中に、其救世主を指して平和の王と呼んで居る（イザイア九の六、七）。それは何故かといふに、神より遣はさ

るゝ救世主は曾て人々の知らざる平和と一致とを此世に齎らすべき筈であつたからである。尙之を詳しく解けば、やがて來るべき救主は眞理を以て智識の一致と平和とを來たさせる。其眞理は神のものなるが故に謬ることが無い。又權威を以て意思の一致と平和とをも來たさせる。其權威は神に本づくものなるが故に正義にして、且つ恩威兼備はること宛ながら父の其れの如くである。尙又愛を以て感情の一致をも來たさせる。其愛は我等一切の人類が神より出でたる同胞であるといふ根本義に基づくが故に極めて友情深きものである。と箇樣な意義に由つて救主をば平和の王と呼んだのである。

されば斯の如き平和と一致との完全なる權化であるべき此王の降臨は、世界が一致と靜謐とを保てる時に於てせらる可きことが當然

であつた。仍て神は其降臨に際して從來然く分裂し居れる國土を羅馬皇帝アウグストと一手の下に統一せしめ、以て天下の靜謐を保たせんと欲し、而して之を事實の上に現はし給うた。佛の知名なる雄辯家にして又著述家であつたボスエの言に據れば『陸と海とを征服したるアウグストは天下泰平の徽としてジアヌス神の神殿を閉鎖した。かゝる事は幾百年來絶えて無かつた所である。天下の民は鼓腹擊壤泰平を謳つて欣んだ。幾多の歷史家の謂へるが如く、其平和は實に羅馬の平和であつた。此時に方りて世界の救主なる基督はユデアのベトレヘムに降誕せられた』。其時神の使者等はベトレヘムの近郊に於て、天の高きより其崇高雄大にして且つ慰藉に富める語を以て此事を人々に告げて曰うた『天の最と高き處には神に光榮あれ、

地には善意の人々に平安あれ』と(ルカ二の一四)。請ふ、吾曹をして玆に聊か其羅馬の平和なるものが神自らの欲し給へる所にして、又その成し給へる所のものなることを擧げしめよ。

夫れ耶蘇基督は三十有餘年の間其使命を忠實に盡し、眞理を敎へ一致、協同、平和、並に博愛を說き、更に全人類の爲に其苦難と其死とを以て神の正義に酬いて之を滿足せしめられた。而して此地上に其足を止めしめたる事業を成し終れる時、彼は其多數の弟子等の目前に於て再び天に還り昇られた。

然し天に還るに先ちて、基督は其事業を人々の間に繼續せしめんことを冀はれた。然らざれば其事業は未だ之を完成したるものと云ふことが出來なかつた。仍て彼は之が爲に其敎會を建てたのである

磐石（ペトロ）の上に建てられたる此教會は、基督の指導の下に其遺言を繼承し、宣傳し、保持すべき使命を有して、其教旨を一點も增減することなく、一畫も變更することなく、世の終まで人々に宣傳し、說明し、而も基督と同じく不能謬の權を有して、謂はゞ基督自身の延長ともいふべきものである。此基督の唯一眞成なる教會は、吾曹の己に教へるが如く、使徒宗傳なる羅馬加特力教會が即ち是であつて、其他には決して有るべきものでない。何となれば此教會獨り聖パウロの夙に教へるが如く『基督の念を有する』（コリント前書二の十六）からである。此基督の念を有するといふことは、之を釋けば即ち其思想、其感情其意思に遺憾なく通曉することである。其教の旨に徹底することである。基督の見たる所と同一の見地に立ちて事物を觀ることである

基督と同一博愛の無限なる中心地に立つことである。基督と同一の熱誠を以て眞、善、正義、一致、平和の御代を冀ひ、且つ之を得しむべく努力することである。特に基督と同一の熱心を以て彼の爲せるが如くに爲し、有ゆる其道を踏襲することである。基督は曾て其弟子即ち其教會に訓へて曰はれた『我汝等に例を示したるは、我が爲しゝ如く汝等にも爲さしめんが爲なり』と、（ヨハネ一三の一五）。請ふ、求めよ、さらば基督の念が羅馬加特力教會に存することを認むるであらう。言ふ勿れ、信者各自に聖書を讀みて、其信すべき所、其行ふべき所を直接に聖靈より學ばんには、教會夫れ不要ぞと。吾曹は世に傳播し弘布しつゝある基督新教幾千派の信仰と實踐とに於る混亂、紛爭、分裂によりて此種の主張の齎らすものを明かに實見して居る。

彼等新教の諸派は聖靈に背き、聖靈に反抗する。然り、基督は其教會に、即ちペトロの上に建てられたる教會に向つて命ぜられた『往きて萬民に教へよ、汝等に聽く者は我に聽き、汝等を輕んずる者は我を輕んず』と。されば教會に遠かるのは是れ即ち基督者に遠かるのである。聞け、有名なる哲學者ティイヌの言を。彼は久しき間科學獨り人類社會の智識、政治、道德上の指揮權を有するものと信ぜしが、轉て其眼を轉じて一層高遠の處に注ぐに及び、科學は竟に人間の心靈と感情とを滿足せしむべき光明たり得ざることを曉り、左の感ずべき言を吐くには至つたのである。曰く『一千八百年來、何時の代にも何處の地にも、一たび加特力教會を遠ざかるや、公私の風俗は頽廢し、人は再び獸的となり、姪逸、冷酷、殘暴、野蠻となり退歩し又墮落する』と（一八九一年六月一日發刊の Revue des Deux mondes に據る）此感ずべき言は今も猶我等の眼前に其實證を示して居る。看よ、現代の自稱文明國なるものを。彼等も亦羅馬加特力教會を排斥して、眼中その者無きが如くに、それ以外に生息せんことを企望した。狂妄なる哉、その驕慢や、その安逸を冀ふ欲望や、彼等は此驕慢と此欲望とに煽られて、古來未だ曾て見ざる底の最大最巧なる物質的文明には到達したり。而もそれと同時に、最も恐ろしき腐敗を來たし、曾て教會の手に依て救ひ出だされし古代と同樣の、殘虐酷惡なる野蠻に立戻つた。其哲學の諸流派は神にも優りて最も聰慧ならんことを望み、一切を說明せんと欲し、加之有ゆる病弊の良藥となる、有ゆる幸福の源泉たらんことを企てた。而も彼等の產出せるものは、吾曹が前にも言へる

如く、懐疑、紛爭、不和、反目、混亂の他は無かつたのである。人間が其物質的幸福の爲に用ゐ得る凡ての資力方策、金錢も、大學者等の智囊も、世は其等の一切を所有した。而も其を用ゐて收めたる所の結果は古來曾て見ざる底の最も紊亂せる、最も利己的の、最も頽癈せる世界を現出することに過ぎなかつた。現に自稱基督敎國民等を惱ましつゝある彼大戰爭、而して將來の人々の爲には恐怖と戰慄との對象たるべき彼大戰亂は、實に此事を證明して猶餘りあるのである。夫れ惡しき基督敎徒は惡しき異敎人よりも常に一層惡しく惡しき基督敎牧師は惡しき平信徒よりも常に優りて惡しゝ。それと同じく惡しき基督敎國民は惡しき異敎國民よりも常に一層惡しいのである。何故かといふに、基督敎國民は眞理と正義とを一層よく意識して居りながら之を害用し、神の賜物と其の援助とを一層多く受けて居り乍ら之を濫用したからである。彼等の罪は一層大きく、其罰は一層嚴しからねばならぬ。異敎者若くは未信者は或は全く知らず、或は知つてもより多く不完全である。故に其罪は比較的小さく其の宥恕を得ることも一層容易なるべき筈である。

博物學者等は言ふ、本能は常に謬らざるものである。看よ、鳥は曾て謬ることなく其巢を造り、乳兒は本能によりて自ら其母の乳を吸ふと。幸なる哉、彼等目下の交戰國民の爲にも、本能は疑なく其救拯たるであらう。彼等は其不幸と其困阨との間に在りて、宛ながら救拯の港を索むるかの如くに、その眼を轉じて羅馬に注いだ。佛、白、並に墺洪諸國の國民は言ふまでもなく、未だ其兒女たらざる英

獨、露の諸國よりセルビア諸邦、及び土耳古の諸政府に至るまで、皆悉く特派使節を遣はして、基督の此世に於る唯一の代表者にして羅馬加特力教會の首長なる羅馬の教皇に、其援助を請ひ、其救濟を求めて居る。ア、本能!! 吾曹は更に反覆して言ふ、ア、本能、汗は實に謬無きものである。彼等は擧りて此謬り能はざる本能により、這箇の大患重病を醫すべき良藥が其處に有る、其處以外には無いといふ事を知覺し意識したのである。若し人々にして之に聽從せんことを欲するならば、羅馬加特力教會は基督の如くに、それと同一の權威、同一の不能謬を以て、專ら平和、一致、輯睦を與へんとする而して事實之を與ふるのである。

されば吾曹は爰に躊躇なく斷言する、羅馬加特力教會は其首長なる羅馬教皇の指導監督の下に、能く謬無き眞理を以て有ゆる人々の智識を一致せしめ、正義にして恩威兼備はること父の如き權威を以て凡ての人々の意思を一致せしめ、尙根底深き相愛を以て一切の人々の感情を一致せしめ得る。否必ず一致せしめねば止まぬ。隨つて平和、輯睦、且つ幸福をも能く與ふるに至るのである。尤も缺くる所無き完福といふものは、其れは天國にあらざれば得ることが出來ぬ。然れども少くとも此世に於て得らるゝ限りの幸福をば、慥かに之を享けしむる、言を換へて云へば、現代の人類を苦惱せしめつゝ在る社會病の良藥は神の聖慮に由りて羅馬加特力教會のみ獨り之を有して居る。此教會以外には此世の何處を探しても到底之を得ることは出來ぬ。吾曹は理に考へ史に徵して斷々乎として之を明言する。

社會病と其良藥 終

（東京大司教伯多祿禮准）

大正四年九月卅日印刷
大正四年十月三日發行

定價金拾五錢

譯者兼發行者　教學研鑽和佛協會
代表者　東京市小石川區關口臺町十九番地　林壽太郎
印刷者　東京市小石川區關口臺町十九番地　下間次郎麿
印刷所　東京市神田區多町一丁目三番地　白王舍
電話浅花五一一一番

不許復製

博士ド、ラツバラン氏原著

物界に顯はるゝ智的計畫

全一冊
郵税共代價金拾五錢

本書は博士が其深遠なる宇宙間に顯はれたる智識の跡を指摘して世界は一大智的計畫によりて造られたることを證明したるものなり

博士スシプレー氏著

智識と腦髓

全一冊
代價郵税共金拾五錢

本書は腦の解剖生理學より腦體は智識の直接發動原因にあらずして其働用は智識活動の必要條件たるに過ぎざることを論明し、智力を説明するは機關主義にあらずして精神主義にあるべきことを結論したるものなり

博士ド、キルワン氏原著

最近進化論

全一冊
代價郵税共金貳拾錢

本書は進化論を誇大的折衷的穏和的の三種に分類し最近の實驗に因つて誇大的折衷的進化論を駁し、現今進化論の勢力は逐次衰退に傾き稍學界に命脈を保てるは獨り穏和的進化論のみなることを論述したる最も嶄新なる良書なり

ク、フエーラン氏著

聖書？教會？

全一冊
郵税金貳錢

フエーラン氏が教權の所在は聖書にあるか將た聖會にあるかを最も簡明に論じたる布教用小冊子なり

ドルワール、ド、レゼー師著

奇異なる團體

全一冊
郵税金貳錢

此小冊子はドルワール師が言文一致を以て人情習慣に反せるも幾多の侵害を被むるも良好なる成功を得、社會に一大勢力を有しつゝ確立せる世にも不思議なる一團體の存することを紹介したるものなり

山口鹿三氏著

加藤博士ノ謬説ヲ匡ス

全一冊
郵税金貳錢

山口鹿三氏が文學博士加藤弘之氏の基督教に孝道忠君愛國を教ふるの義無しとせる謬説を捕へて實例上より其妄を辯じたるものなり

帝國大學教師博士ケーベル氏著

神學及中古哲學 研究の必要

全一冊
代價郵稅共金拾錢

此書はケーベル博士が帝國大學に於て中古哲學史を講ずるの準備として講述せんとせる原稿を直に寄贈に附したるものなり

ドルワール、ド、レゼー師著

眞

全一冊
郵稅金貳錢

右は眞理の人智によりて出でたるものなれば昨の是今の非なりといふ流行の謬說を通俗的に駁述したる布教上最も便利なる小冊子なり

リギヨール師著

ジヤンダーク

全一冊
代價郵稅共金拾五錢

此書はジヤンダークの事蹟を靈的見地より解決したるものにして又最も事實の眞相を略記したる好傳紀なり

博士ブツル氏著

吾は何故公教徒となりしか?

全一冊
代價郵稅共金五錢

本書はプロテスタン教徒なる米國醫學博士が天主公教に歸正したる自己の思想變遷の動機より其經路を誠實に告白したるものなり

博士デーシアン氏著

不思議

全一冊
代價郵稅共金五錢

ルードの奇跡中にて最著名なるベトロドルデル氏の骨折が不思議なる平癒をなしたることを科學的に證明したるものなれば超自然力の存在を否認する現代思潮に向つて之を攻擊する最も有益なる好著なり

ドルワール、ド、レゼー師著

學問之破產

全一冊
代價郵稅共金拾錢

此書は科學の進歩は人をして益々幸福を享けしむるや、社會道德を完全の域に導くや、事物の眞僞に明確の解決を與ふるや等の重要問題を捕へ之を擧證引例細論詳說して大に現今の社會を警誡せし大著なり

ドルワール、ド、レゼー師著

幸福

全一冊
郵稅金五錢

此書は上王公貴人を始め下乞食非人に至る迄泣いて生れ泣いて死ぬ其一生涯の目的は唯々幸福を得やうとするのみにあるを以て主の眞の幸福と眞の不幸は汝の手許にあり汝等注意して之を擇めといへる聖言を土臺にして事理明細に人間の目的を纏述したるものなり

法學博士 戸水寛人氏序
ドルワール、ド、レゼー師著

社會主義と自由思想

全一冊
代價郵稅共金貳拾錢

此書は社會主義の危險其略史即ち濫觴、實行騷擾より更に進んで政治改革的極端なるもの、折衷なるもの等を枚擧して社會黨の宗教と國家に對する態度を明かにし以て日本帝國の將來を警醒したる大著述なり

ヨゼフ、ピロース師著

新教之起原（一名ルーテル實傳）

本書は讀むで字の如くプロテスタン教の發起人ルーテル一生涯の經歷を詳述して新教の起原を明かにし傍ら十六世紀當時の全歐洲の狀態から今廿世紀に至る同教の來歷即ち根原を詳かにして其末葉の濱の眞砂子の數限りなきが如く千流萬派一人一宗の醜態をなせる實際を赤裸々的に縷述せし近今希れに見る珍書なり

全一冊
代價郵稅共金 拾錢

ドルワール、ド、レゼー師著

信仰

此書は人間として精神（心魂）を有せざる人間はないと同時に其精神に信仰の意識を有せざる精神は斷じてない即ち人間が其精神に自然的信仰心を有して居るのが取りも直ほさず心魂が不滅であつて未來のあることを明かに證據立てゝ居ると云ふ事を明說せしものなり

全一冊
代價郵稅共金 貳錢

和佛協會員 林壽太郎氏著

進歩の意義

現代に於て最も多く稱用せらるゝ語は進歩でふことなるべし、然れども社會の進歩人類の進歩でふことは如何なるものに於て果して眞意義を得たるものなりや、若しも進歩にして眞意義を得ざるに於ては、却て是れ國家のために悲むべく憂ふべきことなり、著者哲學的見地より此問題を解決したるものなれば、眇たる小冊子なりと雖も、社會問題に留意するものならば須く一讀すべき良書なり

全一冊
定價郵稅共金 四錢

司祭 ダエルメーン氏著
天使的處女

ヂエンマ

誰れか世に自然界の他超自然界なしといふや、物質界外靈的界なしといふや、本書は近年以太利に於ける不思議なる處女ヂエンマによりて超自然界の表現を事實に證明したるものなり、之を讀むもの信仰の敵者ならば甲を脫いで軍門に降るべく、信仰者ならば益以て度信を厚うすべき珍書なり、宜なる哉此著が今や世界各國語に飜譯せられざるなきこと

全一冊
定價郵稅共金 拾五錢

和佛協會著

現代の發見

全一冊
定價郵税共金 拾錢

邦人多く舊約全書創世紀を以て一種の神話と見做し、其史的價値を認めず、然るに現代に至り古代アッシリア、バビロニアの遺跡より發掘しゝる古碑及磚書を研究し、之を舊約聖書に對照して恰も符節を合したるが如く相一致せるもの頗る多きことを發見せり、此書は是等發見の一部を擧げて、以て舊約書の史的眞價を科學的に立證したるものなり

ドルワール、ド、レゼー氏著

國家の生命

全一冊
定價郵税共金 拾錢

國家の生命は國民の愛國的精神力の消長に係る、而て近時種々なる原因により、之を濟ふの道は國民をして根底ある道徳を得せしむるにある事を縷々論證せるものにして、愛國の士は必讀すべき書なり

ゲキトン氏著

大隱謀

完

四六版百七十四頁
郵税共 貳拾五錢

此書は英國のゲキトン氏が歴史上の發見涅造のために耶蘇新教の信仰が動搖して滅亡せんばかりなりしも同一耶蘇教にして天主公教は其信仰に何の影響もなかりしは全く其信仰の根本に大相違あるに因ることを小説的形式に表明せるものなり

ドルワール、ド、レゼー師著

善惡

全一冊
定價郵税共金 拾錢

善惡てふことは社會をして道德を守らしめんために考へたる區別に過ぎずといふ現今の流行説を根本的に打破するため善惡の別は眞實に存するものなることを論證したる良書なり

ドルワールド、レゼー著

天主公教の頑固

全一冊
郵税共金五錢

世界の大碩學者大政治家大發明家大美術家大音樂家の多くを有する天主公教を頑固と呼ぶ、果して何の根據ありてか？といふことを詳論したるものなり

公教會編纂

天主公教の葬儀

無代無遞送料

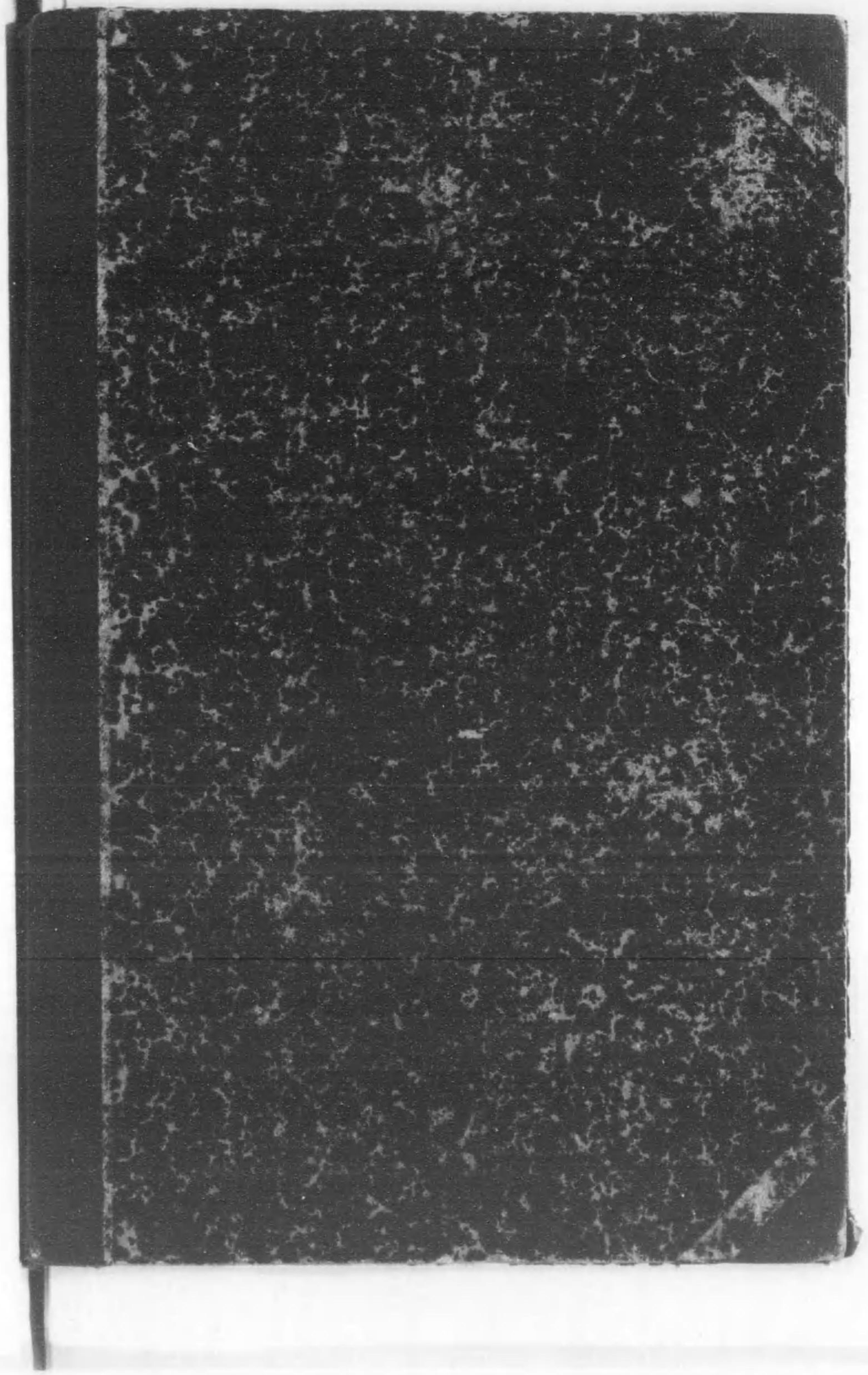
此書は公教葬儀の式と祈禱とを教外者にも解し易く説明したるものなれば、葬儀の際會葬の未信者に配布して其意義を知らしむる適當なる良書なり

ルモアヌ著

現時問題の解決

全一冊
郵税共金拾五錢

此書は現時日本に於ける政治的社會的狀態及家族個人の狀態に對して留意すべき諸問題を簡明に論じたるものにして愛國の士は是非とも一讀すべき良書なり

325
376

終